沖縄県図書館協会誌　第18号　2014

沖縄国際大学図書館での レポートライティング支援事業の課題

「九州大学附属図書館による自律的学習支援体制の構築」に学ぶ

山口　真也　・　糸数　日菜子

■はじめに

筆者(山口)は、勤務する沖縄国際大学総合文化学部日本文化学科の1年生・2年生向けの必修科目を活用し、他の学科教員とも連携しながら、レポートや論文作成の指導に取り組んでいる。具体的には、

1) 1年生前期科目「リテラシー入門」において、意見文や評論文の読み取り方、要約文の書き方を指導し、
2) 1年生後期科目「文化情報処理入門」において、レポート作成に必要となる文献検索の基本的なスキルを指導し[1]、
3) 2年生前期科目「アカデミックライティング」において、卒業研究を想定したレポート・論文の作成方法と各種調査の実施方法を指導する、

という学期進行の流れの下で、1・2年生の段階で、レポート・論文の執筆に必要となるアカデミックスキルの修得を目指している。

この取り組みそのものは、「文章表現力の育成」をカリキュラムの柱にしている日本文化学科独自のものであるが、筆者は、本学の図書委員を務めている関係で、図書館での学習支援サービスの企画・運営にも一部関わらせてもらっている。全国の大学では、図書館を「アクティブラーニング」の中心地として位置づけ、「ラーニングコモンズ」を設置することで学生たちの主体的・能動的な学びの空間を提供したり、レポートの書き方を支援するサービスを取り入れるようになってきている。本学図書館でもこうした動きを取り入れて2013年度後期から「レポートライティングサポート」を図書館の独自事業としてスタートし、筆者も日本文化学科での指導内容の一部を図書館向けにアレンジしたプログラムを提供する形で運営に協力させてもらっているのだが、取り組み始めたばかりの事業であるため、まだまだ検討事項も多い。

2014年9月16日(火)、先進校の視察として、九州大学附属図書館(中央図書館)を訪問し、図書館機能を活用した学習支援サービスの取り組みを教えて頂く機会を得た。九州大学図書館では、学内の競争的な資金(教育の質向上支援プログラム Enhanced Education Program:EEP)を獲得しており、同プログラムのもと「大学図書館による自律的学修支援体制の構築」という取り組みを進めている。この取り組みの一環であるレポートライティングや文献検索の支援を含む学生協働による学習支援サービスの展開は、今年で3年目を迎えている。本稿では、本学図書館での学習支援サービスの現状と問題点を紹介しつつ、九州大学附属図書館(以下、九大図書館)で教えて頂いた様々な知見をふまえて、今後の課

[1] 授業での取り組みの詳細は、「大学生の文献検索行動に関する考察―初年次学生を対象とするアンケート調査から―」『九州地区大学図書館協議会誌』第55号(pp.3-7, 2013)にて発表している。

題について考察してみたい。

■学習支援者の確保

現在、本学図書館の学習支援事業では、レポートライティングの支援は大学院生に、レポート作成に必要な文献を探すための支援は司書課程を履修している在学生(4年生)に担当してもらっている。司書課程の学生については、支援に必要な最低限のスキルはレファレンスサービスなどの授業で学んでおり、また、「現場実習」というインセンティブもあるため支援者を募るのは比較的容易である。本学では図書館学をゼミで専攻する学生(主に4年生)を排架専用の短時間のアルバイトとして1年間雇用しているため、このアルバイト学生が支援者を兼ねることで基礎的なスキルを確保できるという利点もある。ただし、レポート作成をサポートできる大学院生の確保はそう簡単ではない。同じ文系とはいえ、レポートの書き方は専攻・専門分野によって異なるため、学部ごとに設置されている大学院の各専攻の院生が支援者として適しているだろうという判断の下で、専攻ごとに1名の支援者の推薦を大学院担当教員に依頼しているのだが、大学院1年生の間は授業が多く、2年生になると修士論文の作成時期と支援時期がちょうど重なる、という問題もあって、全専攻から支援者を得ることが極めて難しい状況にあるのである。九大図書館ではどのように人員を確保しているのだろうか。

九大図書館では、文献検索とレポートライティングともに大学院生に任せており、2014年度は3つの図書館と学習スペース(中央図書館、伊都図書館、医学図書館、嚶鳴天空広場)において約20名の支援者が配置されているという。かなりの数だが、今のところは「希望者が多く、面接で専攻している」とのことで、特に支援者の確保が難しいという問題は生じていないということであった。その背景には、九州大学ならではの「研究室文化」があり、大学院生が所属する研究室において後輩(学部学生を含めて)にレポートの書き方や文献の調べ方などを指導する機会が日常的にあり、後輩の学習をサポートすることに対するハードルがもともと低い、ということが考えられるという。また、支援者を経験した後に修了した大学院生が、次の院生を紹介するような形で応募につなげていってくれる様子もあり、継続的に事業を進めていれば自然と人員確保の問題は解消するのではないか、ということであった。話の中で特に印象に残ったのは、応募する院生たちのほとんどが「図書館が好き」「図書館と関わりたい」「図書館のために何かをしたい」という気持ちを持っているということである。上述のように、本学図書館では支援者の推薦を大学院教員に依頼する形をとっているのだが、そうした方法よりも、図書館内に貼り紙をするなどの方法で公募した方が人員の確保は容易なのかもしれない。

なお、九州大学大学院には、「ライブラリーサイエンス専攻」も開設されているが、支援者にはむしろ図書館職員がカバーできない部分をサポートしてほしいという希望もあって、各専攻から広く公募しているとのことであった。

■利用状況・学生のニーズ

本学図書館では、予算の都合で学習支援サービスは1年間継続して行っているわけではなく、レポートが出る時期に限定して実施している。つまり、前期は6月中旬から7月下旬、後期は1月中旬から2月中旬というスケジュー

ルである。支援者が図書館にいる時間帯を書いたポスターを学内に掲示し、レポートライティングの支援を希望する学生には事前に(3日前までに)レポートをメールで送信してもらい、支援者はそれを下読みした上で、1人あたり(または1グループ)30分ほどの支援を行う、という、予約制での仕組みを取っている。文献検索の支援では事前の下読みはないが、予約制である点は同じである。

事業が始まる1ヶ月ほど前から広報を開始しているが、「思ったよりも利用が少ない」というのが正直なところである。表1は2013年度後期と2014年度前期の利用状況であるが、利用率は全学部学生の0.14～0.28％に止まっており、かなり低調であると言わざるを得ない。

学期	レポート作成	文献検索	総合計
2013後期	16	16	32
2014前期	8	8	16

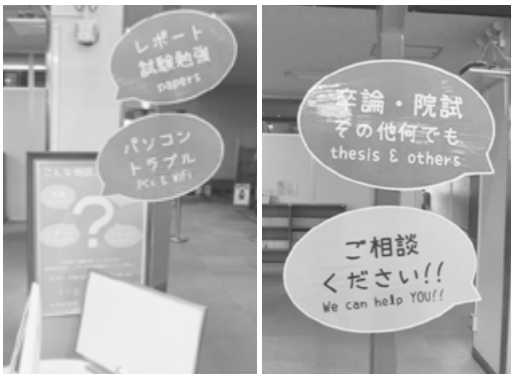
【表1　沖縄国際大学図書館学習支援利用状況　単位：人】

利用が少ない理由としては、①PR不足や②実施時期のミスマッチなどいろいろと考えられるのだが、(自戒の念も込めて考えてみると)、各授業において、図書、雑誌、新聞、各種データベースなど様々な情報資源を活用し、論理的に展開された・正しい日本語で書かれた・出典を明記した(著作権にも配慮した)・形式を整えたレポートを必ずしも求められているわけではない、ということが最大の理由であるようにも感じている。つまり、学期末にレポート提出は課されるが、授業内容や教科書をまとめれば「可」以上の単位が取れてしまう現状では、アルバイト等で忙しい時間を使って、わざわざ図書館に出向いて支援を受けようという動機はそれほど高まってこないようにも思われるのである。つまり、「教員との連携をどのように進めるか？」ということが利用を増やすための大きな課題となっているのだが、九大図書館ではこの点をどのように考えているのだろうか。

話を伺ったところ、個別の学習支援を求める利用者が少ないという点では同じような問題が九州大学でもあるという。また、九州大学では上述のような「研究室文化」もあって、レポートテクニックの修得は各研究室での院生と学部学生の交流の中で完了してしまう面もあって、「わざわざ図書館に行って…」という雰囲気も(理系学部では特に)あるそうだ。九大図書館では本学図書館とは違って、支援時期は限定せずに、医学図書館を除いて、各図書館に専用のカウンターを設けて(図1・2)、月～金曜日まで、3時間目～5時間目の時間帯に1人ずつ院生を配置しているそうだが、学生からの支援の要望が全くない日もあるという。

ただし、ここで気を付けたいことは、九大図書館では学習支援サービスを、レポートライティングや文献検索の支援だけに限定して

【図1　九州大学附属図書館(中央)の学習相談コーナー、以前はレファレンスカウンターとして使われていた(レファレンスカウンターは貸出カウンターの隣へ移動)】



【図2　レポートの書き方・文献検索法だけでなく、定期試験や大学院入試の勉強の方法も教えてくれる】

いるわけではない、ということである。支援者として登録している大学院生は「Cute. Supporters（通称Cuter、九州大学図書館学習相談サポーターの意味）」という名称を与えられ、図1のカウンターでの学習相談以外にも、専門知識を活用した「学習ガイド」や「イベントの企画・運営」なども業務時間内に行っているという。例えば、学習ガイド業務としては、図書館ホームページ内に自分自身の専門分野を紹介する記事を執筆して(職員および他の支援者が査読してからアップ)、関連文献の紹介(パスファインダー的なもの)と自己紹介を兼ねた形での情報発信も行っている。これは、記事を見た利用者が「あ、図書館のカウンターにこの分野の専門家がいるなら、この質問はこの人にしてみよう」と思ってもらうための取り組みである。イベント業務としては、大学院生が自身の研究概要を紹介するイベント(学生団体との共催)も好評だという。このイベントは、大学院生の研究に対する情熱や楽しんで取り組む様子が学部学生に伝わることで、彼らの好奇心や創造性を刺激することをねらったものである。確かに、レポートライティングを中心とした支援だけでは「レポートが出たから(仕方なく)図書館を利用する」という消極的な動機を満足させるだけで終わってしまう恐れもある。本質的な部分で学生の学習意欲を高めるための取り組みとして、こうしたイベントを複合的に進行していくことも、図書館ができる学習支援事業として重要であることに気付かされる。九大図書館では、学生からの個別支援の要望がない時には、こうした学習ガイドやイベントの準備をカウンターでの勤務時間内に行ってよいことになっている。学習支援の内容を単にレポートライティングや文献検索に限定せずに、かなり幅広く位置づけていることが見えてくる。

レポートの支援要望が少ないという問題については、今年度から、個別の学習支援とイベントを結びつけることで解決しようという取り組みが始まっている点にも注目したい。九大図書館(伊都図書館)では、5月30日にまず1年生向けの「レポートの書き方講座」を、支援者である大学院生が講師を務める形で実施し、その後、6月6日、10日、12日の3日間で、再び支援者が講師を務めて「プレゼン講座」を実施する、というイベントを開催したところ、多数の1年生の参加があったという。そして、このイベントの直後から予約制で個別での学習支援(ライティングや文献検索の支援)を開催したところ、普段の何倍もの参加があり、まずは講座(イベント)を開き、その後、個別支援へとつなげることがより効果的だという手ごたえが感じられたそうだ。講座への参加が多かった理由としては、①1年生向けの基幹教育科目でレポート・プレゼンが義務付けられていること、②基幹教育科目の一部の担当者の協力が得られたこと(参加の呼びかけをしてもらえたこと)、さらに、

③参加者を1年生に限定し、早い時期に開催することで、入学直後の意欲が高い学生をうまく図書館に引き込むことができたことなどが挙げられるという。今後も講座から個別支援の流れを作り出すために、「人生の先輩に聴いてみよう」などの企画を考えているという話もあった。

このように九大図書館の学習支援者はさまざまな活動に関わっているが、その時給は1000円であり、90分の個別指導を務める場合に事前事後の準備時間を含めて2時間分の計算となるらしいが、それほど高額というわけではない。1年間の総予算(人件費)は300万円であり、学生数の違いや3カ所で支援が行われている点を考慮すると、本学図書館の予算規模(1年間約40万円)と思ったほど大きな差はない。本学図書館でも十分に実現可能な取り組みとして、学ぶべき点は多いだろう。

■支援者のスキル確保・図書館員の役割

ボランティアではなく、図書館の正式な事業の1つとして学習支援を行うためには、当然、支援者のスキルが問われることになる。本学図書館では、文献検索の支援用マニュアルについては筆者が案を作成し、支援者の感想(資料参照)や学生のニーズを見ながらその改訂を重ねているが、レポートライティングの支援については、現時点では支援者である大学院生任せになってしまっている部分もある。九大図書館では個別支援だけでなく、上述のような講座の講師も依頼するなど、支援者に対してより専門性の高い働きを期待しているようだが、そのスキルはどのように確保・育成しているのだろうか。

九大図書館と本学図書館との大きな違いは、学生の文献検索やレポート作成の支援について、その業務を図書館員が担当していた実績がある、という点である。よって、図書館にはそのマニュアルやシナリオが準備されており、支援者である大学院生にはそれに沿って、各自の専攻に合わせた工夫を織り交ぜながら指導を行っている、ということであった。

とすると、ここで気になるのは、本来は図書館員(司書)がその支援を担当できるのに、なぜ大学院生を支援者として雇っているのか、という点である。最近では多くの大学において図書館員の定員が減らされている背景もあり、専門性をアピールするために、文献検索やレポート作成の支援に図書館員自身が直接関わるという流れもある。この点を確認したところ、「職員が指導するよりも、院生が指導する方が、参加する学生の意欲が高まるから」という返答がまずあった。学部学生にとって大学院生は年齢が近い分、親近感がわく存在であるし、院生の多くが学部を卒業しているため、大学生にとっては学部での4年間の学びを終えた、という点で「モデル的存在」として映りやすいのだろう。また、支援者の中には博士課程まで進んだ院生も含まれており、論文投稿の経験もあることから、その専門分野ではレポートの書き方は図書館員よりも長けている部分もあるという。九州大学には大学教員や研究者を目指す院生が多いと思われるため、将来を見据えてこうした支援に取り組んでいるのかとも思ったが、支援者の多くは企業等への就職を目指しているとのことで、むしろ講座での指導を通じて、「人前でパフォーマンスをするトレーニングになった」という感想も聞こえてきたという。九大図書館では学習支援事業を「学生協働」という観点から進めているが、ここでいう「協働」は、図書館と大学院生だけの協働を意味する

のではなく、学部学生と大学院生の協働まで含む幅広い意味を持っていることが分かる。九大図書館では、学習支援事業に限ってみれば図書館員の役割はあくまでも「裏方」であり、コーディネートが中心となっている。当初はそこにやや物足りなさを感じたが、大学図書館が目指す「アクティブラーニング」が学生が主体となる学び合いの場であることを考えれば、職員が後方からの支援に専念することは当然であることにも気づかされる。学習支援事業が何を目指すのか、そのミッションを明確化することの重要性を改めて考えさせられる指摘であった。

■おわりに・今後の課題

本稿では九州大学附属図書館での取り組みを手がかりに、筆者が所属する沖縄国際大学図書館での学習支援事業の在り方を考えてきた。勿論、国立大学と私立大学、大学院生の人数や学部学生と院生との関係性、理系学部がある大学とない大学、といった様々な相違点が多々あるため、そのままの形で取り入れることができない点もあるが、①学習支援者の公募方法、②学習支援活動の幅広い捉え方、③学習支援の対象の限定、④図書館員の関わり方、という点において大いに学ぶべき点があると感じさせられる視察となった。お忙しい中、視察にご対応いただいた九州大学附属図書館eリソースサービス室eリソースサポート係の兵藤健志様、工藤絵理子様、調査日程を調整して下さった同図書館企画課山根様、同大学文系合同図書室の大谷周平様に、この場を借りてお礼申し上げます。

最後に、参考資料として、本学図書館で今年度前期に文献検索の指導にあたってくれた支援者(日本文化学科4年生・糸数日菜子さん)から提出してもらった感想を添えておきたい。

資料「文献検索のサポートを終えて」

2014年7月から約1か月間、沖縄国際大学図書館の学習支援事業の文献検索サポートを担当した。授業で出されたレポート課題についての相談が主に来ると予想していたが、卒論のテーマ発表を控えた3年生からの相談が中心で、「こうしたテーマで研究をしようと思っているが、定義・歴史などが書かれた文献が見つからない」といった相談が中心となったため、それぞれのテーマに関する基本概念の調査方法についてサポートする形になることが多かった。また、事前に渡されたマニュアルにそって、1つのテーマについて図書だけでなく、調べたいことに合わせて雑誌記事や新聞記事、DBなど幅広い文献を集める手伝いをすることが中心となると考えていたが、実際には、資料がなかなか見つからない「ニッチ」なテーマについて、どう文献を探し出すか、という方向性でのサポートが中心となった点も想像と違っていた点である。

【図3　沖縄国際大学図書館でのレポートライティングサポート(文献検索支援)の様子】

また、卒論の相談に関しては3年生が多かったため、テーマ自体がよく定まっていないと

いう学生も多く、テーマを再検討するための相談に応じることもあった。支援の範囲を越えていないか少し心配もあったが、テーマを再検討するためには、そのテーマの上位概念を考えて、そのことが書かれた本を実際に持ってきて参考にしながらテーマの方向性について話し合うこともあって、その点では文献検索の指導も絡めて行えたかなと思っている。いずれにしても、文献検索の前段階もサポートも期待されていると感じた。

この他、テーマは決まっているが、「本学OPACと沖縄県図書館の横断検索で検索して出てこなかった」という状態で資料収集が止まっている学生も少なくなかったため、マニュアルにそって、各調査ツールの説明と利用方法の指導と検索キーワードを一緒に工夫してみるというサポートもあった。最初に新語辞典や百科事典から調べて、調べたいことを定義しておくのが大切であるということについて知らないもしくは重要視していないという学生もいたため、丁寧に指導するよう心がけた。また、参考文献の書き方があいまいな学生が多かったため、引用の仕方も含めて実際に書いてみてもらうなどして指導したところ、「役に立った」「初めて習った」という声も多く聞かれた。この点も文献検索の支援としてもっと前面に出してもよいと思う。

サポートを始めた頃はマニュアルに書かれていることを上から順番に説明するだけだったが、一緒に調べながら、調査に必要なこととその発展という形で少しずつ教えるやり方のほうが覚えてもらえる上に効率が良いことに気がついてからはスムーズに進行できたと思う。マニュアルで役立ったのは、時事問題について意見を求めるレポートでは、新聞社ごとにそれぞれ立場・カラーの違いがあることをふまえて、偏った意見だけになってしまわないように複数の新聞を調べるように指導できた点である。また、NDCの分類記号の仕組みについて、番号が同じ資料だけでなく、番号を繰り上がったり、繰り下がったりすると関連する資料が探せるという点も「知らなかった」という声が多く、学生が発見できなかった関連書籍を探すのにとても役立った。支援に用いた各種DBについては、自分自身の卒業論文や司書課程の授業で使用した経験があったため、自分が工夫したことなど交えて説明したことで「わかりやすい」と喜んでもらえることもあった。

今回の支援を通して、後輩たちの役に立てるのはとても楽しかったし、司書を目指す自分自身の文献検索の練習にもなり、個人的にはとても有意義なものになったと感じている。拙い指導だったと反省する点も多々あるが、その挽回の為にも、後期にまた機会があれば是非協力したい。(2014年9月16日)

やまぐち　しんや：沖縄国際大学
いとかず　ひなこ：沖縄国際大学